

小学校高学年および中学生における 対象別評価懸念の組み合わせパターンと適応との関連¹⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科 白倉 瞳
筑波大学人間系 濱口 佳和

Fear of negative evaluation by others patterns and relationship with adjustment among early adolescence

Hitomi Usukura (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8577, Japan*)

Yoshikazu Hamaguchi (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8577, Japan*)

Patterns of fear related to negative evaluation by others, and the relationship between such fear and adjustment were investigated by using cluster analysis. Pupils ($N=1316$) in fifth through ninth grades in school participated in this study. The participants responded to the Fear of Negative Evaluation by Others Scale that consisted of 3 subscales: fear of negative evaluation by friends, fear of negative evaluation by parents, and fear of negative evaluation by teachers. Cluster analysis identified five subgroups, which suggested that the fear of negative evaluation by others varied in different individuals. Results of a two-factor analysis of variance revealed that the main effect of acquired cluster factor was significant in tendencies for depression, eating disorders, self-esteem, and being absent from school. Especially, children scoring high on all the subscales assessing the fear of negative evaluation by others experienced more maladjustment. Moreover, children scoring high for relationships at school, and for parents also experienced high maladjustment.

Key words: fear of negative evaluation by others, friends, parents, teachers, elementary and junior high school students

児童期後期から青年期前期は、自己意識の確立や認知能力の発達を背景に、他者からの否定的な評価に対する不安が高まるとされている (Westenberg, Drewes, Goedhart, Siebelink, & Treffers, 2004)。例えば、友人関係において「仲間はずれにされないように話を合わせる」と答えた小学生は51.6%、中学生は44.4%にのぼり (ベネッセ教育総合研究所, 2010)。「相手からどのように思われているのか」、

「相手から悪く思われていないか」という心配を抱きながら友人づきあいをしている者は少なくないと思われる。しかし、周囲からどう思われているかを気にする傾向や他者からの否定的な評価を恐れる傾向が極端に強まった場合、対人不安傾向が高まるほか、社交不安障害 (social anxiety disorder) に陥る可能性もある。石川 (2006) は、一般児童の中で不安障害に類似した症状を示す児童は多く、児童の不安障害は最も有病率の高い問題のひとつであると指摘している。したがって、児童期後期から思春期にかけて高まると考えられる「他者から否定的に評価

1) 本研究のサンプルおよび分析の一部は、第47回日本カウンセリング学会で発表された。

されることへの恐れ」を取りあげ、病理化を防ぐ手立てを検討する必要があると言えるだろう。

この「他者から否定的に評価されることへの恐れ」は、評価懸念 (fear of negative evaluation) と呼ばれている。評価懸念は「他者からの否定的な評価に対する心配、および否定的に評価されるのではないかという予測に対する不安の程度」と定義されており (Watson & Friend, 1969, p.449)、対人不安の中核的な概念 (Leary, 1983 生和訳 1990) であり、かつ社交不安障害の背景にあると考えられている (Rapee & Heimberg, 1997)。評価懸念には、面前に他者が存在するかしないかといった状況の違いはあまり関係がなく、他者に否定的に評価される材料を与えてしまったかどうかかわからない場合や客観的に考えると不安を感じる理由は何もない場合でさえも生じることが指摘されている (山本・田上, 2001)。

先述した通り、評価懸念は社交不安障害と関連が深い概念として取り上げられる一方、青年期以降において、パニック障害や全般性不安障害などの他の不安障害 (Oei, Kenna, & Evans, 1991)、抑うつ (Collins, Westra, Dozois, & Stewart, 2005; O'Connor, Berry, Weiss, & Gilbert, 2002)、摂食障害 (Gilbert & Meyer, 2005)、自尊心の低さ (Kocovski & Endler, 2000) などとの関連が明らかにされている。また、児童期においても、ソシオメトリック法における拒否児や無視児の地位 (La Greca, Dandes, Wick, Shaw, & Stone, 1988)、自己価値観の低さ (La Greca & Stone, 1993) などの心理社会的適応との関連が知られている。つまり、評価懸念は単なる対人不安の構成要素にとどまらない、様々な不適応問題の理解や解決に有効な概念であると考えられる。

ところで、山本・田上 (2001) は、懸念が喚起される状況の種類が多いほど対人的な不適応に結びつく恐れがあると指摘しているが、評価懸念が生じる状況を「誰からの否定的評価を恐れるか」という視点で区別して検討した研究は見当たらない。先行研究では、評価懸念が生じる相手として、「誰か」や「他の人」など一般的な他者を想定させており、児童・生徒を対象とした研究では、「みんな」など友人のみを想定させている場合が多い。しかし、先行研究では、児童期後期から思春期にかけては、子どもの精神的健康に影響を与える対人関係は友人関係だけに限定されないことが知られている。酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村 (2002) は、子が親に抱く信頼感が学校適応に影響を与えていることを明らかにしているほか、江村・大久保 (2012) は、教師との関係が児童の適応感と正の関連を示すことを指摘している。したがって、小・中学生が抱く評価懸念

を抱く対象は友人のみとは限らない可能性があり、親や教師を含めた幅広い人間関係を取り上げることが、不適応問題の理解につながると考えられる。

評価懸念を抱く相手が区別されていないという先行研究の問題点を踏まえ、白倉・濱口 (2015) は、小学校高学年および中学生における評価懸念を「友人に対する評価懸念」、「親に対する評価懸念」、「教師に対する評価懸念」の3つの側面から捉えた対象別評価懸念という概念を提唱した。下位尺度間で中程度から強い正の相関が見られるものの、モデル適合度は1因子構造よりも3因子構造の方が値が良好であり、各下位尺度の α 係数も.83~.94と高い値が示されていることから、「友人に対する評価懸念」、「親に対する評価懸念」、「教師に対する評価懸念」はそれぞれ独立に測定することができる概念であると考えられる。さらに、対象別評価懸念ごとに異なる適応指標との関連が見られたことから、対象別で評価懸念を検討することが不適応問題の理解には有効であることが指摘されている (白倉・濱口, 2015)。

このように評価懸念を対象別という視点で捉えた場合、友人、親、教師の全ての対象に対して評価懸念を抱く者は、評価懸念を抱く対象が少ない者よりも様々な不適応問題の得点が高まることが予想される。また、どの対象に対する評価懸念が高いかによって、不適応問題の表出パターンが異なることも予想される。したがって、本研究では、「友人に対する評価懸念」、「親に対する評価懸念」、「教師に対する評価懸念」の3つの対象別評価懸念の高低のパターンによる類型を探索的に検討し、得られた類型と適応指標との関連を検討することを目的とする。なお、適応指標は、精神疾患傾向として抑うつ傾向と摂食障害傾向、心理的適応の指標として自尊心、社会的不適応の指標として不登校傾向と学級での反社会的傾向の5つを取り上げる。

方 法

調査対象者²⁾

質問項目が多く、調査対象者の回答にかかる負担を軽減するため、等質と思われる2種類のサンプルに対して異なる質問紙を実施した。2種類のサンプルは、いずれも茨城県南地域および隣接する地域の公立小学校4校と公立中学校4校に通う児童・生徒である。サンプル1は、茨城県内の小学校5、6年

2) 本研究のサンプルには、白倉・濱口 (2015) と同一サンプルが含まれている。

生390名（5年生122名，6年生268名；男子203名，女子187名）と，同県内の中学校1～3年生306名（1年生191名，2年生54名，3年生61名；男子156名，女子145名，不明5名），計696名であった。サンプル2は，同県内の小学校5，6年生316名（5年生224名，6年生92名；男子164名，女子150名，不明2名）と，同県内の中学校1～3年生304名（1年生159名，2年生56名，3年生89名；男子162名，女子142名），計620名であり，両サンプルを合わせ，計1316名であった。

調査時期

2012年9月～2015年7月に実施した。

調査内容

サンプル1と2には性別と学年，「おうちの人」，「家の人」の選択，対象別評価懸念尺度を共通して実施した。加えて，サンプル1では抑うつ傾向，摂食障害傾向，学級での反社会的傾向を測定する尺度，サンプル2では自尊心と不登校傾向を測定する尺度を実施した。

1) 性別と学年

2) 「おうちの人」，「家の人」の選択

両親のいない調査対象者の回答にかかる負担に配慮し，両親に関する項目では「おうちの人」（中学生には「家の人」と表記）という表現を採用した。「おうちの中であなたに1番影響を与えている人」を「お父さん，お母さん，おじいちゃん，おばあちゃん，自由記述」の選択肢から1人選択するよう求めた上で，以降の質問で「おうちの人」，「家の人」という言葉が出てきた際には，選択した人物を想定して答えるよう教示した。

3) 対象別評価懸念尺度

白倉・濱口（2015）が作成した26項目を用いた。「あてはまる（5点）」～「あてはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。

4) 抑うつ傾向を測定する尺度

村田・清水・森・大島（1996）が作成したBirlerson自己記入式抑うつ評定尺度（DSRS-C）であり，子どもの最近1週間の抑うつ症状について尋ねる尺度である。18項目について，「いつもそうだ（2点）」～「そんなことはない（0点）」の3件法で回答を求めた。

5) 摂食障害傾向を測定する尺度

永田・切池・中西・松永・川北（1991）が作成した摂食障害症状評価尺度（SRSED）を用いた。本尺度は，主に青年期以降の摂食障害患者を対象に使用される尺度であるが，小学校5年生から中学校3

年生を対象に使用され（森・小原，2003），女子のみならず男子にも適用されていることから（森・嘉糠，2003）用いることとした。摂食障害全般のスクリーニングテストとして使用する場合には，「過食と食事による生活支配」と「食べることへの圧力」の2因子で十分とのことから（永田他，1991），2因子12項目について，「いつもそう（4点）」～「全くない（1点）」の4件法で回答を求めた。

6) 自尊心を測定する尺度

桜井（1992）が作成した児童用コンピテンス尺度の下位因子「自己価値」を用いた。「自己価値」は自分に対する全般的な自己評価であり（桜井，1992），ほぼ自尊感情に対応すると考えられている（桜井，1999）。10項目について，「はい（4点）」～「いいえ（1点）」の4件法で回答を求めた。

7) 不登校傾向を測定する尺度

古市（1991）が作成した学校ざらい感情測定尺度を用いた。12項目について「よくあてはまる（5点）」～「まったくあてはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。

8) 学級での反社会的傾向を測定する尺度

酒井他（2002）が作成した学校への不適応傾向尺度の下位因子「反社会的傾向」を用いた。「反社会的傾向」のみを取り出して使用した先行研究が他にもあることから（e.g. 岡田，2009），この因子を抜粋して用いた。6項目について，「あてはまる（4点）」～「あてはまらない（1点）」の4件法で回答を求めた。

実施手続き

各学校の学校長に依頼し，承諾を得た学級に対して無記名式の質問紙調査を集団で実施した。なお，本研究は，第2著者が所属する教員組織の研究倫理委員会の承認を得て実施された。

結 果

対象別評価懸念尺度のサンプルの等質性の確認

2つのサンプルを1つの分析に用いるため，これらが等質かどうかを確認する必要があると思われる。そこで，学校段階共通にサンプル1と2における対象別評価懸念尺度の各下位尺度得点についてt検定を行った。その結果，「友人に対する評価懸念」($t(1241)=0.61, n.s.$)，「親に対する評価懸念」($t(1263)=0.04, n.s.$)，「教師に対する評価懸念」($t(1168.50)=0.61, n.s.$)のいずれにおいてもサンプル間で得点に有意差は見られなかった。以上の結果から，サンプル1と2をほぼ等質とみなし，以降の

分析を進めることとした。

対象別評価懸念尺度の性差・学校段階差の検討

各下位尺度の平均値について、性別および学校段階を要因とした2要因分散分析を行った (Table 1)。

「友人に対する評価懸念」($F(1,1233)=97.45, p<.001$)、「親に対する評価懸念」($F(1,1256)=4.17, p<.05$)、「教師に対する評価懸念」($F(1,1203)=20.64, p<.001$)の全てで有意な性別の主効果が見られ、女子の方が男子よりも得点が高かった。学校段階については、「友人に対する評価懸念」($F(1,1233)=0.50, n.s.$)、「親に対する評価懸念」($F(1,1256)=1.71, n.s.$)、「教師に対する評価懸念」($F(1,1203)=1.71, n.s.$)の全てで有意な主効果は見られず、交互作用も有意にならなかった。

抑うつ傾向では、有意な性別の主効果が見られ ($F(1,506)=7.01, p<.01$)、女子の方が男子よりも得点が高かった。また、有意な学校段階の主効果が見

られ ($F(1,506)=31.51, p<.001$)、中学生の方が小学生よりも得点が高かった。なお、交互作用は有意にならなかった ($F(1,506)=0.10, n.s.$)。

摂食障害傾向では、有意な性別の主効果は見られず ($F(1,647)=0.02, n.s.$)、有意な学校段階の主効果も見られなかった ($F(1,647)=3.66, n.s.$)。交互作用も有意にならなかった ($F(1,647)=0.51, n.s.$)。

自尊心では、有意な性別の主効果が見られ ($F(1,584)=7.47, p<.01$)、男子の方が女子よりも得点が高かった。また、有意な学校段階の主効果が見られ ($F(1,584)=5.13, p<.05$)、小学生の方が中学生よりも得点が高かった。なお、有意な交互作用が認められたため ($F(1,584)=8.80, p<.01$)、単純主効果の検討を行った。その結果、女子では小学生の方が中学生よりも得点が高く ($F(1,584)=13.10, p<.001$)、中学生では男子の方が女子よりも得点が高かった ($F(1,584)=16.02, p<.001$)。

不登校傾向では、有意な学校段階の主効果が見ら

Table 1
各下位尺度における性別、学校段階別の平均値と分散分析結果

対象者	小学生			中学生			F-value				
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	性	学校段階	交互作用		
友人に対 する評価 懸念	サンプル 1, 2	<i>n</i> 337 <i>M</i> 17.47 <i>SD</i> (7.36)	324 22.37 (7.62)	661 19.87 (7.88)	303 17.72 (7.72)	273 21.50 (8.19)	576 19.51 (8.16)	97.45*** 男子<女子	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	
	親に対す る評価懸 念	サンプル 1, 2	<i>n</i> 355 <i>M</i> 17.44 <i>SD</i> (7.96)	320 18.83 (7.99)	675 18.10 (8.00)	305 17.37 (7.28)	280 17.76 (7.52)	585 17.56 (7.39)	4.17* 男子<女子	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
		教師に対 する評価 懸念	サンプル 1, 2	<i>n</i> 329 <i>M</i> 17.73 <i>SD</i> (8.00)	306 20.36 (8.30)	635 19.00 (8.25)	298 17.65 (7.66)	274 19.23 (8.09)	572 18.41 (7.90)	20.64*** 男子<女子	<i>n.s.</i>
抑うつ傾 向			サンプル 1	<i>n</i> 180 <i>M</i> 9.31 <i>SD</i> (5.37)	166 10.61 (5.17)	346 9.94 (5.31)	89 12.27 (7.05)	75 13.92 (6.86)	164 13.02 (6.99)	7.01** 31.51*** 男子<女子 小<中	
	摂食障害 傾向		サンプル 1	<i>n</i> 189 <i>M</i> 17.26 <i>SD</i> (5.05)	176 17.49 (4.47)	365 17.37 (4.77)	146 18.34 (6.34)	140 17.98 (4.86)	286 18.16 (5.66)	<i>n.s.</i> <i>n.s.</i>	
		自尊心	サンプル 2	<i>n</i> 155 <i>M</i> 24.12 <i>SD</i> (6.18)	143 24.24 (6.30)	298 24.17 (6.23)	152 24.48 (6.05)	138 21.53 (6.58)	290 23.08 (6.47)	7.47** 5.13* 男子>女子 小>中	
不登校傾 向			サンプル 2	<i>n</i> 149 <i>M</i> 31.87 <i>SD</i> (11.47)	140 30.28 (12.19)	289 31.10 (11.83)	156 26.35 (9.83)	140 27.45 (11.74)	296 26.87 (10.77)	<i>n.s.</i> 19.87*** 小>中	
	学級での 反社会的 傾向		サンプル 1	<i>n</i> 199 <i>M</i> 7.56 <i>SD</i> (2.42)	184 6.77 (1.19)	383 7.18 (1.97)	150 10.73 (4.87)	140 8.26 (3.17)	290 9.54 (4.31)	46.32*** 94.05*** 男子>女子 小<中	

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

れ ($F(1,581) = 19.87, p < .001$)、小学生の方が中学生よりも得点が高かった。有意な性別の主効果は見られず ($F(1,581) = 0.07, n.s.$)、交互作用も有意にはならなかった ($F(1,581) = 2.06, n.s.$)。

学級での反社会的傾向では、有意な性別の主効果が見られ ($F(1,669) = 46.32, p < .001$)、男子の方が女子よりも得点が高かった。また、有意な学校段階の主効果が見られ ($F(1,669) = 94.05, p < .001$)、中学生の方が小学生よりも得点が高かった。なお、有意な交互作用が認められたため ($F(1,669) = 12.32, p < .001$)、単純主効果の検討を行った。その結果、性別の単純主効果の検討では、男子 ($F(1,669) = 90.53, p < .001$) および女子 ($F(1,669) = 18.47, p < .001$) において学校段階の単純主効果が有意であり、男女ともに中学生の方が小学生よりも得点が高かった。また、学校段階の単純主効果の検討では、小学生 ($F(1,669) = 6.30, p < .05$) および中学生 ($F(1,669) = 46.75, p < .001$) において性別の単純主効果が有意であり、小・中学生ともに男子の方が女子よりも得点が高かった。

対象別評価懸念の組み合わせパターンによる類型の生成

「友人に対する評価懸念」、「親に対する評価懸念」、「教師に対する評価懸念」の組み合わせのパターンを明らかにするため、各下位尺度の標準得点に基づき、学校段階共通に K-means 法によるクラスター分析を行った。なお、分析対象は欠損回答の見られなかった1138名である。

4もしくは5クラスターを設定して分析を行ったところ、特に5クラスター分類では、対象別評価懸念尺度の下位尺度全てが高いあるいは低いクラスターに加え、「友人に対する評価懸念」と「教師に対する評価懸念」といった学校で関わりを持つ対象に対する評価懸念が高いクラスターや、「親に対する評価懸念」のみが高いクラスターが抽出された。各対象別評価懸念の高低に特徴のあるクラスターが得られるとともに、最も解釈しやすい分類は5クラスター分類であると考えられたため、本研究においてはクラスター数を5とした。各クラスターのプロフィールを Figure 1に示す。

CL1は、「親に対する評価懸念」の得点のみが0.5SD以上であることから「親に対する評価懸念高群」と命名した。このクラスターに該当する人数は234名であり、分析対象者の20.6%を占めていた。CL2は、全ての対象別評価懸念の得点が高い群であることから「全般的の高群」と命名した。このクラスターに該当する人数は141名であり、分析対象者の

12.4%を占めていた。CL3は、「友人に対する評価懸念」と「教師に対する評価懸念」の得点が高い群であることから「学校での評価懸念高群」と命名した。このクラスターに該当する人数は152名であり、分析対象者の13.4%を占めていた。CL4は、全ての対象別評価懸念の得点が低い群であることから「全般的低群」と命名した。このクラスターに該当する人数は383名であり、分析対象者の33.7%を占めていた。CL5は、全ての対象別評価懸念の得点がおおむね $\pm 0.5SD$ 以内にあることから「平均群」と命名した。このクラスターに該当する人数は228名であり、分析対象者の20.0%を占めていた。

各クラスターにおける人数の偏りと性別・学校段階との関連

各クラスターの人数に偏りがあるかどうかを検討するために χ^2 検定を行った。その結果、人数の偏りに有意差が認められたため ($\chi^2 = 164.35, df = 4, p < .001$)、残差分析を行った (Table 2)。期待値からの有意な人数の偏りが見られたのは、「全般的の高群」、「学校での評価懸念高群」、「全般的低群」の3群であった。期待値よりも有意に人数が多かったのは「全般的低群」であり、全体の約3割強を占めていた。また、期待値よりも有意に人数が少なかったのは「学校での評価懸念高群」と「全般的の高群」であり、それぞれ全体の約1割強を占めていた。

さらに、クラスター分類と性別について χ^2 検定を行った。なお、分析対象者は性別無記入の4名を除く1134名であった。分析の結果、人数の偏りに有意差が認められたため ($\chi^2 = 64.53, df = 4, p < .001$)、残差分析を行った (Table 3)。その結果、全ての群で男女間の人数に有意な偏りが見られた。男子の人数が期待値よりも有意に多かったのは「親に対する評価懸念高群」と「全般的低群」であった。また、女子の人数が期待値よりも有意に多かったのは「全

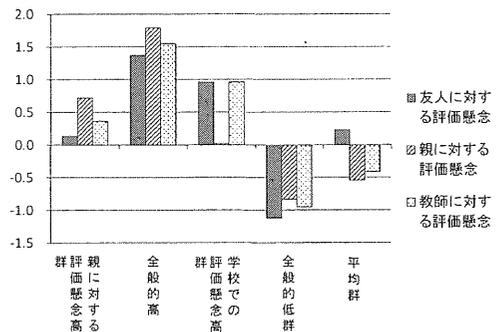


Figure 1. 各対象別評価懸念に基づく5クラスター分類における得点分布

般の高群」, 「学校での評価懸念高群」, 「平均群」であった。

クラスター分類と学校段階についても χ^2 検定を行ったが, 学校段階間に有意な人数の偏りは見られなかった ($\chi^2=1.68, df=4, n.s.$)。

各クラスターにおける各適応指標得点の比較

クラスター間で適応指標の得点に有意な差が見られるかを検討するため, 各適応指標の平均値について性別およびクラスターを要因とした二要因分散分析を行った (Table 4)。

抑うつ傾向では, 有意なクラスターの主効果が見られ ($F(4,435)=12.36, p<.001$), Tukey法による多重比較の結果, 「全般的高群」が「平均群」よりも高い得点を示した。また, 「全般的低群」, 「親に対する評価懸念高群」および「学校での評価懸念高群」, 「全般的高群」の順で得点が高くなった。性別については有意な主効果は見られず ($F(1,435)=0.21, n.s.$), 交互作用も有意にはならなかった ($F(4,435)=1.32, n.s.$)。

摂食障害傾向では, 有意なクラスターの主効果が見られ ($F(4,561)=13.43, p<.001$), Tukey法による多重比較の結果, 「親に対する評価懸念高群」が「全般的低群」よりも高い得点を示した。また, 「学校での評価懸念高群」と「全般的高群」が「全般的低群」と「平均群」よりも高い得点を示した。性別については有意な主効果は見られず ($F(1,561)=3.49, n.s.$), 交互作用も有意にはならなかった ($F(4,561)=0.79, n.s.$)。

自尊心では, 有意なクラスターの主効果が見られ ($F(4,506)=7.55, p<.001$), Tukey法による多重比較の結果, 「全般的高群」が「平均群」と「全般的低群」よりも低い得点を示した。また, 「学校での評価懸念高群」と「親に対する評価懸念高群」が「全般的低群」よりも低い得点を示した。加えて, 有意な性別の主効果が見られ ($F(1,506)=4.91, p<.05$), 女子の方が男子よりも得点が低かった。一方, 交互作用は有意にはならなかった ($F(4,506)=1.24, n.s.$)。

不登校傾向では, 有意なクラスターの主効果が見られ ($F(4,504)=7.64, p<.001$), Tukey法による多重比較の結果, 「全般的高群」が「全般的低群」と「平均群」よりも高い得点を示した。また, 「親に対する評価懸念高群」と「学校での評価懸念高群」が「全般的低群」よりも高い得点を示した。性別については有意な主効果は見られず ($F(1,504)=1.02, n.s.$), 交互作用も有意にはならなかった ($F(4,504)=1.83, n.s.$)。

学級での反社会的傾向では, 有意な性別の主効果が見られ ($F(1,577)=40.33, p<.001$), 男子の方が女子よりも得点が高かった。クラスターについては有意な主効果は見られず ($F(4,577)=1.18, n.s.$), 交互作用も有意にはならなかった ($F(4,577)=1.51, n.s.$)。

考 察

「友人に対する評価懸念」, 「親に対する評価懸念」, 「教師に対する評価懸念」の標準得点に基づく

Table 2
クラスター分類における人数分布

	親に対する 評価懸念高群	全般的高群	学校での 評価懸念高群	全般的低群	平均群
N	234 (0.4)	141 (-5.7**)	152 (-5.0**)	383 (10.3**)	228 (0.0)
%	20.6%	12.4%	13.4%	33.7%	20.0%

$\chi^2(4)=164.35, p<.001$

表中の数値は人数, () 内の数値は標準化残差 ** $p<.01$

Table 3
クラスター分類における性別内訳

	親に対する 評価懸念高群	全般的高群	学校での 評価懸念高群	全般的低群	平均群	合計
男子	134 (2.0*)	58 (-2.7**)	53 (-4.5**)	248 (6.4**)	93 (-3.6**)	586
女子	99 (-2.0*)	83 (2.7**)	99 (4.5**)	133 (-6.4**)	134 (3.6**)	548
合計	233	141	152	381	227	1134

$\chi^2(4)=64.53, p<.001$

表中の数値は人数, () 内の数値は調整済み残差 * $p<.05$, ** $p<.01$

クラスター分析の結果、全ての得点が高い「全般的
高群」、全ての得点が平均的な水準の範囲内にある
「平均群」、全ての得点が低い「全般的低群」に加え、
「親に対する評価懸念」のみ得点が高い「親に対す
る評価懸念高群」、「友人に対する評価懸念」と「教
師に対する評価懸念」の得点が高い「学校での評価
懸念高群」の5つのクラスターが抽出された。3つ
の下位尺度それぞれの高低に特徴のある「学校での
評価懸念高群」と「親に対する評価懸念高群」が抽
出されたことから、個人内で対象ごとに評価懸念の
高さは異なる場合もあることが示唆されたと言えよ
う。

また、各クラスターの人数の偏りを検討するため
に χ^2 検定と残差分析を行った結果、人数が期待値
よりも有意に多かったのは「全般的低群」であり、
人数が期待値よりも有意に少なかったのは「学校で
の評価懸念高群」と「全般的高群」であった。した
がって、友人や教師といった学校で関わりを持つ対
象や全ての対象に対して高い評価懸念を抱く者の人
数は少ないことが示された。しかし、いずれかの対
象に対して高い評価懸念を抱いていると考えられる
「全般的高群」、「親に対する評価懸念高群」、「学校

での評価懸念高群」の3群に所属する人数の総数は
全体の約5割弱を占めていた。したがって、対象別
評価懸念が高いと思われる3群それぞれの人数の割
合は大きくなくとも、ある特定の対象に対して評価
懸念を抱く者全体の割合は決して少なくないことが
推察される。

さらに、クラスター分類と性別について χ^2 検定
と残差分析を行った結果、男子の人数が期待値より
も有意に多かったのは「親に対する評価懸念高群」
と「全般的低群」であり、女子の人数が期待値より
も有意に多かったのは「全般的高群」、「学校での評
価懸念高群」、「平均群」であった。男子は、親の期
待に応えられなかった場合に親が落胆するという落
胆反応予期を女子よりも高く抱くことが明らかにさ
れており（渡部，2013）、男子は自分の振る舞いに
対する親からの評価を否定的な方向で予期する傾向
にあると考えられる。そのため、「親に対する評価
懸念高群」では男子の人数が多くなった可能性があ
る。また、児童・思春期を対象とした研究では、女
子の方が男子よりも評価懸念得点が高いことが指摘
されていることから（Hartmann et al., 2010; La
Greca et al., 1988; 岡田・渡田，1992；岡島・福原・

Table 4
各適応指標における性別、クラスター別の平均値と分散分析結果

	男子					女子					F-value	性	クラスター	交互作用
	親に対 する評 価懸念 高群	全般的 高群	学校で の評価 懸念高 群	全般的 低群	平均群	親に対 する評 価懸念 高群	全般的 高群	学校で の評価 懸念高 群	全般的 低群	平均群				
抑うつ 傾向	11.26 (5.88)	16.90 (6.42)	12.59 (5.50)	8.43 (5.43)	9.66 (5.92)	11.88 (5.40)	14.31 (6.71)	13.02 (5.83)	10.19 (6.00)	10.84 (5.45)	12.36*** 5 < 2 4 < 1,3 < 2	n.s.	n.s.	
摂食障 害傾向	18.57 (5.61)	21.92 (7.84)	19.05 (5.77)	16.32 (4.85)	17.09 (4.24)	18.18 (4.58)	19.23 (4.13)	19.00 (5.34)	15.76 (4.00)	16.52 (3.65)	13.43*** 4 < 1 4,5 < 3,2	n.s.	n.s.	
自尊心	24.29 (6.30)	22.81 (7.22)	22.39 (5.33)	24.94 (5.92)	24.92 (6.42)	23.18 (6.53)	19.39 (5.69)	20.66 (6.15)	25.50 (6.61)	24.00 (6.45)	4.91* 7.55*** 2 < 5,4 3,1 < 4	女子 < 男子	n.s.	
不登校 傾向	31.15 (10.28)	37.36 (14.97)	29.07 (7.45)	25.61 (10.24)	28.50 (9.79)	30.16 (12.88)	31.05 (12.82)	32.41 (11.92)	26.24 (11.37)	26.37 (11.58)	7.64*** 4,5 < 2 4 < 1,3	n.s.	n.s.	
学級で の反社 会的傾 向	8.60 (2.93)	10.00 (4.99)	9.32 (3.66)	8.57 (4.13)	9.96 (4.85)	7.43 (2.44)	7.59 (2.49)	7.27 (1.94)	7.36 (2.61)	7.12 (1.55)	40.33*** n.s. 女子 < 男子	n.s.	n.s.	

()は標準偏差 * $p < .05$, *** $p < .001$

クラスター名として記載されている数字の割り当ては右記の通り 1 = 親に対する評価懸念高群, 2 = 全般的高群, 3 = 学校での評価懸念高群, 4 = 全般的低群, 5 = 平均群

山田・坂野・La Greca, 2009; 山本・田上, 2007), 「全般的高群」では女子が, 反対に「全般的低群」では男子が, 期待値よりも人数が多くなったと思われる。さらに, 友人関係が学校適応やストレスに及ぼす影響は女子の方が男子よりも大きく(高旗・山本, 1998), 教師との関係についても女子の方が男子よりもストレスとして高く評価する傾向があることから(岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992), 「学校での評価懸念高群」では女子の人数が多くなったのだと考えられる。

次に, 5つの適応指標の平均値について性別およびクラスターを要因とした二要因分散分析を行ったところ, 抑うつ傾向, 摂食障害傾向, 不登校傾向ではクラスターの主効果のみが, 学級での反社会的傾向では性別の主効果のみが, 自尊心では性別とクラスターの主効果が示された。

抑うつ傾向については, 「全般的高群」が「平均群」よりも高い得点を示し, 「全般的低群」, 「親に対する評価懸念高群」および「学校での評価懸念高群」, 「全般的高群」の順で得点が高くなった。つまり, 全ての対象に対して評価懸念を抱く者の抑うつ傾向の得点の高さが顕著であることが示されたと言える。身近な対象の中で評価懸念を抱く対象が多くなるほど, 本人にとって気の休まる場所は少なくなると思われる。このような日常生活の中での窮屈さが小学校高学年および中学生の抑うつ感の増加に関与するのではないだろうか。

摂食障害傾向については, 「親に対する評価懸念高群」が「全般的低群」よりも高い得点を示し, 「学校での評価懸念高群」と「全般的高群」が「全般的低群」と「平均群」よりも高い得点を示した。したがって, 特に友人と教師という学校での人間関係において評価懸念が高まる者は, 全ての対象に対して評価懸念を抱く者と同程度に摂食障害傾向の得点が高いと言える。西園(2008)によると, 70年代から摂食障害の症例の多くは, 比較的裕福な家庭の「いい子」であり, 今でもこのような例は多いという。このような「いい子」は, 教師からは問題のない子として評価される一方で, 大人からの否定的な評価に敏感な子でもあるとも言えるのではないだろうか。また, 学校は体育の授業など自分の身体的特徴が目にとられる機会が多く, 他者と比較されやすい環境にあるため, 学校場面での評価懸念の高さは摂食障害傾向を高めるのかもしれない。

自尊心については, 「全般的高群」が「平均群」と「全般的低群」よりも低い得点を示し, 「学校での評価懸念高群」と「親に対する評価懸念高群」が「全般的低群」よりも低い得点を示した。したがっ

て, 全ての対象に評価懸念を抱く者だけでなく, 親や学校での人間関係の中で評価懸念を抱く者も同様に自尊心が低い状態にあると考えられる。子どもの自尊心に対しては, 同世代の仲間(川畑, 1996)や親の養育行動(小玉, 2010)だけでなく, 教師からの影響も決して少なくない。Ryan & Grolnick(1986)は, 教師をあたたかく自律性を尊重してくれると評価している児童は, 教師を否定的に評価している児童よりも自尊心が高いことを報告している。Murray & Greenberg(2000)も, 教師との関係性を低く評定している子どもの心理社会的適応が悪いことを明らかにしている。つまり, 友人関係と教師との関係が子どもの自尊心に及ぼす影響は大きく, これらの関係性において評価懸念を抱くことは, 全ての対象に評価懸念を抱くことと同じくらい自尊心の低さに影響すると思われる。また, 性別の主効果も有意であり, 女子の方が男子よりも自尊心の得点が低かった。梶田(1980)によれば, 自尊心は小学生から中学生で大きく低下し, その傾向は女子に特に見られるという。本研究の対象者は小学校高学年から中学生であり, 女子において自尊心の低下が顕著に見られたため, 男子の方が得点が高くなったのではないだろうか。

不登校傾向については, 「全般的高群」が「全般的低群」と「平均群」よりも高い得点を示しただけでなく, 「親に対する評価懸念高群」と「学校での評価懸念高群」も「全般的低群」よりも高い得点を示した。つまり, 全ての対象に対して評価懸念を抱く者だけでなく, 友人と教師という学校での人間関係において評価懸念が高まる者や親に対して評価懸念が高まる者も不登校傾向が高まると言える。中学生時の不登校の発生には, 友人関係のストレスが特に影響を及ぼしているとの指摘があるが(野島・三好, 2004), 本研究では友人だけでなく, 親や教師に対する評価懸念が高い者も不登校傾向の得点が高かった。鳥袋(2003)は, 教師の援助の保有感と親の努力評価が弱い時に, 結果的に不登校感情が強まることを指摘している。教師に対する評価懸念が高い場合には, 教師に対して援助サポートを求めにくいことや, 親に対する評価懸念が高い場合には, 親の評価に敏感なあまり「いい子」としての姿が当たり前になり, 親から努力を認めてもらう機会が少なくなることが考えられる。したがって, 従来指摘されてきた友人だけでなく, 親や教師に対して評価懸念が高い者も不登校傾向得点が高まったのではないだろうか。

学級での反社会的傾向については, 性別の主効果が見られ, 男子の方が女子よりも得点が高いことが

示されたが、クラスターについては有意な主効果は見られなかった。学級での反社会的行動傾向は、男子の方が女子よりも得点が高いことが指摘されていることから（酒井他，2007）、本研究でも先行研究と同様の結果が得られたと考えられる。なお、本研究で取り上げた5つの適応指標のうち、学級での反社会的傾向でのみクラスターの主効果が見られなかった。不安の高い子どもの中には親や教師から見て望ましい行動を示す児童が含まれている可能性が指摘されているが（石川・坂野，2006）、この不安の高さは評価懸念といった認知的な不安の高さではなく、恐怖など情動的な不安の高さが背景にあると考えられる。そのため、対象別評価懸念の高さによる類型によって、有意な得点差は示されなかったのかもしれない。

本研究では、「全般的高群」において全ての不適応指標の得点が高く、身近に評価懸念を抱く対象が多いほど心理・社会的適応が損なわれる恐れがあることが示された。先述した通り、評価懸念は社交不安障害の背景にあるとされる概念であるが（Rapee & Heimberg, 1997）、社交不安障害の発症年齢は13歳との報告が複数あり（Kessler et al., 2005; Schneier, Johnson, Hornig, Liebowitz, & Weissman, 1992）、10代半ばに発症するケースが多いとされている。上記を踏まえ、小学校高学年から中学生における対象別評価懸念の高さは看過できるものではなく、特に、幅広い対象に対して高い評価懸念を抱いている児童・生徒に対しては、病理化の危険性を考慮して経過を注視していく必要があると思われる。今後は、対象別評価懸念の病理化を防ぐ具体的かつ有効な手立てを解明することが求められるだろう。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所（2010）. 第2回子ども生活実態基本調査報告書（2009年）初等中等教育研究室 Retrieved from <http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3333>（平成27年9月26日）
- Collins, H.A., Westra, H.A., Dozois, D.J.A., & Stewart, S.H. (2005). The validity of the brief version of the fear of negative evaluation scale. *Anxiety Disorders, 19*, 345-359.
- 江村早紀・大久保智生（2012）. 小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討 発達心理学研究, *23*, 241-251.
- Gilbert, N., & Meyer, C. (2005). Fear of negative evaluation and the development of eating psychopathology: A longitudinal study among nonclinical women. *International Journal of Eating Disorders, 37*, 307-312.
- Hartmann, T., Zahner, L., Pühse, U., Schneider, S., Puder, J. J., & Kriemler, S. (2010). Physical activity, bodyweight, health and fear of negative evaluation in primary school children. *Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports, 20*, e27-e34.
- 古市裕一（1991）. 小・中学生の学校ざらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, *24*, 123-127.
- 石川信一（2006）. 子どもの不安障害 坂野雄二・丹野義彦・杉浦義典（編）不安障害の臨床心理学 東京大学出版会, pp.135-151.
- 石川信一・坂野雄二（2006）. 自己評定による児童の社会的スキルと不安症状の関連 カウンセリング研究, *39*, 202-211.
- 梶田叡一（1980）. 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 川畑徹朗（1996）. セルフエスティーム（自尊心）を育てる 初等教育資料, *647*, 68-71.
- Kessler, R.C., Berglund, P., Demler, O., Jin, R., Merikangas, K.R., & Walters, E.E. (2005). Lifetime prevalence and age-of-onset distributions of DSM-IV disorders in the National Comorbidity Survey Replication. *Archives of General Psychiatry, 62*, 593-602.
- Kocovski, N.L., & Endler, N.S. (2000). Social anxiety, self-regulation, and fear of negative evaluation. *European Journal of Personality, 14*, 347-358.
- 小玉陽士（2010）. 親の養育スキルが子どもの自尊感情に及ぼす影響—子どもの認知に焦点を当てて— 日本教育心理学会第52回総会発表論文集, 321.
- La Greca, A.M., Dandes, S.K., Wick, P., Shaw, K., & Stone W.L. (1988). Development of the social anxiety scale for children: Reliability and concurrent validity. *Journal of Clinical Child Psychology, 17*, 84-91.
- La Greca, A.M., & Stone, L.W. (1993). Social Anxiety Scale for Children-Revised: Factor structure and concurrent Validity. *Journal of Clinical Child Psychology, 22*, 17-27.
- Leary, M.R. (1983). *Understanding social anxiety: Social personality and clinical perspectives.*

- Newbury Park, CA: Sage Publications. (リアリイ, M.R. 生和秀敏 (監訳) (1990). 対人不安 北大路書房)
- 森 千鶴・嘉藤美津希 (2003). 小学生の体型とボディイメージ, 摂食障害との関連 日本看護研究学会雑誌, **26**, 218.
- 森 千鶴・小原美津希 (2003). 思春期女子のボディイメージと摂食障害との関連 山梨大学看護学会誌, **2**, 49-54.
- 村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・大島祥子 (1996). 学校における子どものうつ病—Birlerson の小児期うつ病スケールからの検討— 最新精神医学, **1**, 131-138.
- Murray, C., & Greenberg, M.T. (2000). Children's relationship with teachers and bonds with school: An investigation of patterns and correlates in middle childhood. *Journal of School Psychology*, **38**, 423-445.
- 永田利彦・切池信夫・中西重祐・松永寿人・川北幸男 (1991). 新しい摂食障害症状評価尺度 Symptom Rating Scale for Eating Disorders (SRSED) の開発とその適用 精神科診断学, **2**, 247-258.
- 西園マーハ文 (2008). 学童期, 思春期の摂食障害 中根 晃・牛島定信・村瀬嘉代子 (編) 詳解子どもと思春期の精神医学 金剛出版, pp. 494-500.
- 野島正剛・三好和子 (2004). 特性不安および生活上のストレスと中学生時の不登校傾向との関連 児童文化研究所所報, **26**, 29-41.
- O'Connor, L.E., Berry, J.W., Weiss, J., & Gilbert, P. (2002). Guilt, fear, submission, and empathy in depression. *Journal of Affective Disorders*, **71**, 19-27.
- Oei, T.P.S., Kenna, D., & Evans, L. (1991). The reliability, validity and utility of the SAD and FNE scales for anxiety disorder patients. *Personality and individual differences*, **12**, 111-116.
- 岡田守弘・渡田典子 (1992). 評価懸念および自己制御感から観た児童の学校不適応感の測定について 横浜国立大学教育紀要, **32**, 151-187.
- 岡田有司 (2009). 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響—一部活動のタイプ・積極性に注目して— 教育心理学研究, **57**, 419-431.
- 岡島 義・福原佑佳子・山田幸恵・坂野雄二・La Greca, A.M. (2009). Social Anxiety Scale for Children-Revised (SASC-R) と Social Anxiety Scale for Adolescents (SAS-A) 日本語版の作成 児童青年精神医学とその近接領域, **50**, 457-468.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 (1992). 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, **63**, 310-318.
- Rapee, R.M., & Heimberg, R.G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, **35**, 741-756.
- Ryan, R.M., & Grolnick, W.S. (1986). Origins and pawns in the classroom: Self-report and projective assessments of individual differences in children's perceptions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 550-558.
- 酒井 厚・菅原ますみ・木島伸彦・菅原健介・眞榮城和美・詫摩武俊・天羽幸子 (2007). 児童期・青年期前期における学校での反社会的行動と自己志向性—短期縦断データを用いた相互影響分析 パーソナリティ研究, **16**, 66-79.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22.
- 桜井茂男 (1992). 小学校高学年生における自己意識の検討 実験社会心理学研究, **32**, 85-94.
- 桜井茂男 (1999). 子どものやる気と社会性 風間書房
- 島袋恒男 (2003). 小・中学生の学習意欲と不登校感情に関する研究—親・教師との関係性を中心に— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 168.
- Schneier, F.R., Johnson, J., Hornig, C.D., Liebowitz, M.R., & Weissman, M.M. (1992). Social phobia: Comorbidity and morbidity in an epidemiologic sample. *Archives of General Psychiatry*, **49**, 282-288.
- 高旗正人・山本穂波 (1998). 学級の間人関係と登校回避感情に関する実証的研究 岡山大学教育学部研究集録, **108**, 93-100.
- 臼倉 瞳・濱口佳和 (2015). 小学校高学年および中学生における対象別評価懸念と適応との関連 教育心理学研究, **63**, 85-101.
- 渡部雪子 (2013). 期待への行動結果に対する親の反応についての予期尺度作成の試み 立正大学心理学研究所紀要, **11**, 67-73.
- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of

- social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 448-457.
- Westenberg, P.M., Drewes, M.J., Goedhart, A.W., Siebelink, B.M., & Treffers, P.D.A. (2004). A developmental analysis of self-reported fears in late childhood through mid-adolescence: Social-evaluative fears on the rise? *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **45**, 481-495.
- 山本淳子・田上不二夫 (2001). 評価懸念に関する文献研究と今後の課題 教育相談研究, **39**, 37-46.
- 山本淳子・田上不二夫 (2007). 思春期における評価懸念と承認欲求との関連 カウンセリング研究, **40**, 116-126.

(受稿10月30日：受理11月13日)